

平成二十四年(二〇二二年)七月十八日 分け御霊

神から人へ、人から神へ。

人から神に捧げるものは、ただに心の清らかな祈り。欲得のない、計算のない、無心のままの素なる想いよ。さにて本日、分け御霊、神から分かれたれし魂と、その役割を説いてゆかむ。

基より人に与えられしは、他の生物と変わらぬ魂、命の基の微細な波動を、発する力の源のみ。

なれどそにては、宇宙の進化は、高次の次元上昇は、進まず、起こらず、抄らず。^{はかど}

さにて神は自らの、魂を分かち与えるものを、備わす器を 世に出だしたり。

それまで歩きし四足になく、二足に歩き、手を操り、道具を作り、道具を使う。

声に想いを表して、他にも伝える術を得し。^{すべ}

ことばは 神と人との間に、高度の通信交流を、可能ならしむ よすがとなれり。

さにて人は、神の願いを、その魂に担わせられて、地上に神の降り立てる、天国世界を実現せむもの。

なれば人は、祈りを宣りて、神の願いを身一つに、心に受けて、一体化せむ。

祈りの波動に合わせゆかば、神の願いも伝わり易く、人の我欲は霧消して、御魂の波動も高まらむ。^{むしよ}

本来 神の波動を宿せし、高き波動の魂なれば、さらにも波動を高めることこそ、先ずは己の使命ならむ。

神から預かる尊き御魂の、それぞれに持つ尊き使命を、この世にあるうち、生きるうち、少しも果たし、学びを刻めよ。

この世に起くる全てのごとが、御魂の波動を高める仕組み。

悲しきことも、辛きことも、その身に起くる一切が、神の与えし機会なり。

嬉しく楽しきことのみならば、御魂の成長、進化なし。

努力を惜しみ、何も祈らず、ただに命を浪費して、流れに任せる生ならば、命の終わりに何も残らず。

御魂の宝も 栄光もなし。

あの世に持ち来る この世の学び、心の富も光もなし。

人は日々に繰り返すもの。過ち、間違ひ、傲慢、不遜。

積もり積もらば、御魂は曇り、神の波動を失わる。

この世に生れし喜びも、生かざる感謝も 薄れてゆきなむ。

生ある間に満喫せよ。喜び、悲しみ、苦しみ、惑ひ。

さにて御魂は 輝かむ。命の学びは深められむ。

そして祈りで神を求めよ。

求める心が、迷いを救わむ。

救われて、初めて得らるる、真の安らぎ。その安らぎこそが、神のみ救ひ。

その後 人は悟りを得。御魂を通じて、神と一つの、宇宙と一つの 統一世界を。

今こそ、人は 気づくときなり。御魂の奥に秘められたる、己の靈性、本質に。

それを十二分にも活かしてこそ、人は真の幸を得む。

壊れることなき、消えるなき、変わる事なき、不変の幸い。

神に戻れる日の来ることを、神のみ胸に戻れるときを、人は希求し、欲して止まぬ。

なれど、御魂を磨き清めて、神の波動に戻さねば、帰ることは許されじ。

神もその日を待ち侘びたり。地上世界の人類が、人の使命を果たし終え、神の御魂に戻り来る日を。

何万年もの永きに亘りて、飽きることなどさらになく、神はただひたすらに見守り待たる。

気づける者から、応えてゆくべし。できることから始めるべし。やがては広がり、隅々までも、光は広がり、輝き亘らむ。

さこそ。